2013 年 6 月 12 日放送

頻用処方解説　麻杏甘石湯

東邦大学医療センター大森病院 東洋医学科　　**板倉　英俊**

１．主な効能

麻杏甘石湯の主な効能は気管支喘息、小児喘息です。

２．処方の出典・処方名の由来

麻杏甘石湯は、『傷寒論』を出典とする薬です。『傷寒論』太陽病中篇に、「發汗後さらに桂枝湯をあたう可からず。汗出でて喘し、大熱無きものは、 麻黄杏仁甘草石膏湯与うべし。」、太陽病下篇に、「下後、更に桂枝湯をあたう可からず。もし汗出でて喘し、大熱無きものは、麻黄杏仁甘草石膏湯を与うべし。」と記載されています。

処方名の由来は、麻黄・杏仁・甘草・石膏の 4 つの生薬から構成された方剤のため、それぞれの一文字をとって麻杏甘石湯といいます。

３．生薬構成の漢方的解説

君薬の麻黄で、肺の宣発機能をととのえます。臣薬の石膏で、肺熱を清します。この麻黄と石膏は相須の関係です。相須とは相助け合う薬の組み合わせのことを言います。ふたつの生薬を配合することで、肺に鬱した熱を清して、喘息をしずめる力が増強されます。佐薬の杏仁は、肺気の上逆を降ろして、麻黄の薬効を補佐します。使薬の甘草は、麻黄と石膏の副作用を軽減しています。また、甘草には呼吸の急迫を鎮める作用もあります。

４．古医書における記載

百百漢陰（1774-1839）の『梧竹楼方函口訣』には、「麻杏甘石湯は喘息の薬である。暑寒のたびに起こるものは、大抵この方でよい。小青竜湯加石膏・杏仁の症とよく似ているが、かの方は熱が少なく、冷飲に属する水寒射肺の症に用い、この方は熱を主として用いるので、弁別を要する。また乳児などで、熱が強く喘咳するものに用いると奇効がある。」と記載されています。

浅田宗伯（1815-1894）の『勿誤薬室方函口訣』では、「麻黄杏仁甘草石膏湯は、麻黄湯の裏の薬で、汗が出て喘するというのが目標である。熱が内裏に沈渝して上肺部に薫蒸するものを麻黄、石膏の力で解するものである。それゆえに、この方と越婢湯の使用目標には、「大熱なく」という字句を加えてある。」と記載されています。

５．現代における用い方

喘鳴があり、呼吸困難などを訴える患者で、口渇や自然な発汗、熱感などがあるときに使用します。気管支喘息では、発作治療薬として使用できます。

６．EBM

最新の論文を紹介します。麻杏甘石湯に銀翹散を加えた煎じ薬に、インフルエンザ A の H1N1 患者の解熱までの時間を短縮する効果があることを、中国で行われた無作為化非盲検試験で明らかにしました。中国ベイジング・チャオヤン病院（Beijing Chao-Yang Hospital）の Chen Wang 氏らが、“Ann Intern Med”誌の 2011 年 8 月 16 日号に報告しました。

７．処方適応のポイント

この方剤の証の熱の状態は一般に悪熱をともなわず、激しい高熱を示すこともありません。また発熱の無いときにも用いることも可能です。喘息して、胸のなかに熱がこもって苦しい時に使用します。

８．類方との鑑別

麻黄湯は、悪寒して身体痛があって、喘鳴するときに使用します。一般に麻杏甘石湯では悪寒や身体痛は認めません。小青竜湯は悪寒があって口渇がなく、心下痞硬や胃内停水をしばしば伴います。麻杏甘石湯の証では、腹診をしても心下痞硬や胃内停水はあまり認めません。五虎湯は麻杏甘石湯に桑白皮という清熱の生薬を加えた薬で、こじらせてより肺熱がつよく、肺熱のため痰が黄色く粘るときに使用されます。

30 歳の女性、数日前から悪寒、頭痛を自覚していました。来院の 1 日前から、悪寒はな

くなったものの、呼吸困難感と胸苦しさ、咳嗽が出現するようになりました。とくに夜になると呼吸が苦しくなり、真横になると呼吸困難感が悪化し、かるく体を起こした方が楽とのことでした。痰がらみはあまりなく、その他の自覚症状として口渇があって、体に熱感を自覚し、わずかに汗をかくとのことでした。

診察の所見は以下になります。体温 37.1 度。舌はやや乾燥、舌尖が紅く、舌苔は淡い黄で薄い。脈状は、弦滑やや数でした。聴診上、呼気終末に軽いラ音あり。腹診では、心下痞硬・胃内停水を認めませんでした。このため、感冒によって誘発された気管支喘息と診断しました。漢方医学的には肺熱による喘証と考え、麻杏甘石湯エキス顆粒（TJ-55）7.5g/day を分 3 で処方しました。

経過は、薬を内服したその夜から息切れ・胸苦しさが軽減し、4 日後にはほぼ症状が消失しました。